

発表タイトル	『方丈記』の受容：夏目漱石とディクソンを中心に
発表者所属名	国際日本研究専攻
発表者氏名	ゴウランガ チャラン プラダン
<p>『方丈記』は成立して間もないうちに様々な作品によって色々な形で受容されてきた。『閑居友』や『十訓抄』のように長明の隠遁生活に関心を抱くものや『平家物語』や『ひとりごと』の如く仏教的な無常思想を強く意識する作品等が挙げられる。そして、江戸時代に入ると、『方丈記』の注釈書も出ており、本作品は日本人の間でずっと親しまれてきたことがわかる。今日に至るまで、この作品は日本文学の中で重要視されてきたものであることは言うまでもないであろう。ただし、『方丈記』が日本人のみに愛されてきたかと言うと決してそうではない。明治期の国内外の資料を観察すると、早くから外国人もこの作品に関心を寄せてきたことがわかる。</p> <p>よく知られているように、『方丈記』の最初の外国語訳は、夏目漱石が帝国大学在学中、英文学科の教授であったディクソン（James Main Dixon）の依頼により行われた。それには（<i>A Translation of Hojio=ki with a Short Essay on It</i>）（1891年12月）という題名が与えられ、『方丈記』の英訳（「<i>Hojio=ki</i>」）と、鴨長明に対する独自の考えをまとめたエッセイ（<i>A Short Essay on It</i>）が収められた。漱石が行った英訳文を最初に読んだディクソンは、これをもとにして1892年2月に（<i>Chōmei and Wordsworth : A Literary Parallel</i>）及び（<i>A Description of my Hut</i>）という『方丈記』の英訳を独自に試みた。日本文学史で高く評価されてきた『方丈記』を外国に初めて発信するにあたって、漱石とディクソンが抱いた『方丈記』や鴨長明に対するイメージは、この作品の国内外における受容史を検討する上で重要な意味をもつと考えられる。</p> <p>そこで、本発表では、英語文献において『方丈記』がいつごろから、いかなる形で言及され、どのように海外に伝わったのかという点を探りつつ、その関連の中でディクソンと『方丈記』との出会いについて言及する。また、当時のお雇い外国人がこの作品をどのように捉えたのかという点に注目し、漱石とディクソンの試みた長明とワーズワースの比較の考えの元にいかなる思想があったのかを検討してみる。さらに、漱石のエッセイとディクソンの書いた論文がいかなる関係をもつのかという点についても考察を行い、これらの検討を通じて国内外における『方丈記』の受容についての理解を深めたい。</p>	